

## 第7回 岡山済生会総合病院 がん診療連携拠点病院研修会

平成30年6月14日 18:30~20:00  
管理棟4階第1・第2会議室

### 「皮膚障害のある抗がん剤の化学療法について」

内科医長 犬飼道雄

化学療法は飛躍的に進歩しているが、まだ完治にいたるのは限られたがん種のみである。したがって化学療法を行うにあたり、余命の延長だけでなく QOL や ADL など患者が納得のいく治療を提供することが重要である。

化学療法の副作用として、皮膚障害がある。皮膚障害は単に外観を損なうだけでなく、痛みや運動障害、引きこもり等の原因となり、身体的・精神的に悪影響をもたらす。化学療法を行うにあたり副作用の目安として Grading が存在し、副作用の治療と同時にそれに従い薬剤の休止や減量を行ってゆく。血液毒性などは数値によって Grading が明確になされることが多いが、皮膚障害は数値では表せず、医療者の主観が含まれた Grading となってしまう。いつも強い副作用がでる化学療法は継続することは困難であるため、治療にも悪影響を与えてしまう。

当院での実例を提示しながら、皮膚障害のある抗がん剤治療の適正化について考えてゆく。

### 「がん治療に伴う皮膚障害とその治療」

岡山済生会総合病院 皮膚科診療部長 吉富 恵美

分子標的薬は悪性腫瘍の治療において重要度が増し、多くのがん腫において今や欠かせない治療選択肢となっている。一方、分子標的薬による特徴的な皮膚障害も多く見られている。皮膚障害は生命にかかわらないものの、患者 QOL を著しく損なうことが多々あるため、それを理由に治療から離脱する例もあるのが現状である。しかし、皮膚障害は予後良好因子となることもわかってきており、皮膚科医がその皮膚状態に応じて予防や治療を行い、がん治療が継続できるように支援することが重要となる。

本日は、分子標的薬による皮膚障害であるざ瘡様皮疹・乾燥性皮膚炎・爪囲炎・手足症候群についてとその予防・対処法について述べる。また、従来の殺細胞性抗癌剤による皮膚障害についてもあわせて供覧する。